東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006年5月19日

審判の日を信じること。

親愛なるムスリム皆様。よいこと、悪いことは、必ずそれに見合った対応がなされます。私達はこの世界が、一つの試練の場であることを信じています。短いお客としての滞在の後、毎日何千もの人々が旅立っていく永遠の世界へ私達もまた出発するのです。審判の日を信じることは私達の信仰の基本的な部分の一部です。そこで私達皆が、この世で行ったこと、あるいは行わなかったことについて尋問を受ける、ということを疑いなく信じます。そうでなければ、不公正、不公平が生じるからです。

アッラーは、星章第３１節で「本当に天にあり地にある凡てのものは、アッラーの有である。だから悪行の徒には相応しい報いを与えられ、また善行の徒には最善のもので報われる。」と仰せられておられます。アッラーは審判の日を、報奨と罰の与えられる日とされ、預言者章第４７節では「われは審判の日のために、公正な秤を設ける。１人として仮令芥子一粒の重さであっても不当に扱われることはない。われはそれを（計算に）持ち出す。われは清算者として万全である。」と仰せられておられます。人がこの世界で行ったことについては、その人自身の肉体が証言を行います。このことは御光章第２４節で明らかに示されています。「その日、かれらの舌と手と足は、その行ったことに就いてかれらに（不利な）立証をする。」

ムスリムの皆様。崇高なるアッラーの裁きの場が開かれる時を、クルアーンは次のように説いています。

「その日、人びとは分別された集団となって（地中から）進み出て、かれらの行ったことが示されるであろう。一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る。」（地震章第６－８節）

「やがて、（終末の）一声が高鳴り、人が自分の兄弟から逃れる日、自分の母や父や、また自分の妻や子女から（逃れる日）。その日誰もかれも自分のことで手いっぱい。（或る者たちの）顔は、その日輝き、笑い、且つ喜ぶ。だが（或る者たちの）顔は、その日埃に塗れ、暗黒が顔を覆う。」（眉をひそめて章第３３－４１節）

「一人ひとりに、われはその運命を首に結び付けた。そして復活の日には、（行いの）記録された一巻が突き付けられ、かれは開いて見る。（かれは仰せられよう。）『あなたがたの記録を読みなさい。今日こそは、あなた自身が自分の清算者である』」（夜の旅章第１３－１４節）

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のハディースで、今日のフトバを締めくくりたいと思います。

「審判の日、人は以下の五つのことについて必ず問われるであろう。１―　人生をどこで費やしたか　２―　若年時代をどこで費やしたか　３―　財産をどこから得たか　４―　財産をどこで費やしたか　５―　学んだことをそれほど実践したか。」